

2021年7月25日（日）「あなたのパンを水面に投げよ」

《聖書協会共同訳》 コヘレトの言葉 11:1-6

- 1 あなたのパンを水面に投げよ。月日が過ぎれば、それを見いだすからである。
- 2 あなたの受ける分を七つか八つに分けよ。地にどのような災いが起こるか、あなたは知らないからである。
- 3 雲が満ちれば、雨が地に降り注ぐ。木が南に倒れても、北に倒れても、その倒れた場所に木は横たわる。
- 4 風を見守る人は種を蒔けない。雲を見る人は刈り入れができない。
- 5 あなたはどこに風の道があるかを知らず、妊婦の胎内で骨がどのようにできるかも知らないのだから。すべてをなす神の業は知りえない。
- 6 朝に種を蒔き、夕べに手を休めるな。うまくいくのはあれなのか、これなのか、あるいは、そのいずれもなのか、あなたは知らないからである。

《新改訳 2017》 伝道者の書 11:1-6

- 1 あなたのパンを水の上に投げよ。ずっと後の日になって、あなたはそれを見出す。
- 2 あなたの受ける分を七、八人に分けておけ。地上でどんなわざわいが起こるかをあなたは知らないのだから。
- 3 濃い雲が雨で満ちると、それは地上に降り注ぐ。木が南風や北風で倒れると、その木は倒れた場所にそのまま横たわる。
- 4 風を警戒している人は種を蒔かない。雨雲を見ている人は刈り入れをしない。
- 5 あなたは妊婦の胎内の骨々のことと同様に、風の道がどのようなものかを知らない。そのように、あなたは一切を行われる神のみわざを知らない。
- 6 朝にあなたの種を蒔け。夕方にも手を休めてはいけない。あなたは、あれかこれかどちらが成功するのか、あるいは両方とも同じようにうまくいくのかを知らないのだから。

【序論】

「コヘレトの言葉」からの講解説教も、残すところ二章となりました。人の人生を導く神からの知恵を聞き取ろうと努めてきましたが、最後の二つの章は大まかに次のように分類しておくことができるでしょう。

11章：若者への教え

12章：年配者への教え

このように分けてはみたものの、両者は密接に関連し合っており、一続きの人生を分離することはできません。若者もいつか必ず年をとりますから、その日に備えて生きるべきことが教えられています。若さには勢いがありますが、同時に経験が少ないため失敗も多いものです。反対に、年をとると新しいことにチャレンジする意欲が失われてい

くかもしれません。信仰者としていつまでも若々しい心を持ち、それと同時に人生の各ページを適切に歩いていくために、コヘレトは貴重な教訓を与えてくれています。

【本論】

本論 1. パンを水面に投げよ (適用範囲の特定)

あなたのパンを^{みなも}水面に投げよ。月日が過ぎれば、それを見いだすからである。(11:1)
聖書の中で最も有名な聖句の一つです。また、様々な場面で引用されます。引用するに当たって、本書全体の文脈から見てそれが適切であるかどうかを確認しておく必要があるでしょう。この聖句は幅広い適用範囲の可能性を持っていますので、一通りそれを見たいと思います。

①商取引

財産の一部を失う可能性を^{はら}孕んだリスクを取って、海上貿易に従事せよ。

②献金

神への信頼を込めた献げ物は、いつの日にか大きな祝福となって自分に返ってくる。

③農業

氾濫によって肥沃となった大地に種を蒔くならば、多くの収穫を期待できる。

④若い時期に多くの友をつくっておく

友に良くしておくのと、自分の危急のときに助けてくれるかもしれない。

⑤慈善の業

貧しい人々への施しは、結果として自分に返ってくるものとなるだろう。

⑥伝道

御言葉の種を蒔くならば、その種がいつか、聞いた人の内で芽を出すだろう。

以上、参考書と共にこれまで耳にしてきた適用と併せてまとめてみました。いずれにも真理が含まれていますが、この箇所が本質的に言おうとしていることは、やはり文脈で捉える必要があるでしょう。11:2を読むと、それが見えてきます。

あなたの受ける分を七つか八つに分けよ。地にどのような災いが起こるか、あなたは知らないからである。(11:2)

ここで言われている「あなたの受ける分」とは基本的にお金にまつわる事柄であり、「七つか八つに分けよ」とは資産をひと所に置いておかないようにとの戒めです。このこと

は、船で物品の輸出をする人々に例えてみると分かりやすくなりますが、一艘の大きな船に全部を乗せて運んだ場合、嵐や海賊など、何らかのトラブルに巻き込まれた際、すべてが失われてしまいます。そのような危険を避けるため、複数の船に分けて運搬した方がリスクは分散されるということです。「七つか八つ」という表現は「多数」を意味する慣用表現でしょう（もちろんもっと多くてもよい）。

このことから、個人の資産管理においても、複数の場所に分散投資をしておくことが古代からの知恵として教えられているようです。タンスの中にお金をしまいこんでおくのではなく、それを如何に「生きたもの」として活用し、賢明に増やし、与え主である主のために用いるかを考える必要がある（ロスチャイルド家を筆頭にユダヤ人はお金を増やすのがうまい！）。聖書は「財産管理」という事柄を重要視しており、お金を「聖いもの」として増やしていくべきことを、多くの箇所ですべて語っています。

本論 2. 自然現象に対する人間の無力さ（3～6節）

さて、3節以下では自然現象にまつわるいくつかの例が挙げられていきますが、これまでの話との結びつきで捉えるならば、先行きの見えない世にあって生き残る知恵と行動力を持つことが勧められているでしょう。

雲が満ちれば、雨が地に降り注ぐ。木が南に倒れても、北に倒れても、その倒れた場所に木は横たわる。（11:3）

ここでは、「雨が降る法則」と「倒木」という二つの自然現象が挙げられています。コヘレトがこれらを通して伝えようとしている真理は「人間には自分の周りで起きていることをコントロールできない」ということです。降ってくる雨を止めることはできず、腐食によって倒れる木の方向を決めることはできない。また、一般庶民には世界経済をコントロールすることができないという事実も、ここには含まれているでしょう。よって、自分にはどうにもできないことばかりを見つめて身動きが取れなくなってしまうことがないようにと、4節では戒められています。

風を見守る人は種を蒔けない。雲を見る人は刈り入れができない。（11:4）

ここでは、条件が完璧に整った天候を待ち続けていては成功には至らないということが言われています。穂が風で吹き飛ばされることを恐れて苗を植えることをためらったり、雨が降ってくるのではないかと心配して刈り入れのタイミングを逃してしまったり。ここでは農業に特化して言われていますが、それ以外の働きにおいても、どんどん移り変わっていく世の中であって、いつまでも「昔はこうだった」とこだわっていたり、新しいことにチャレンジするのを恐れて一步を踏み出さないでいる状態にも置き換えるこ

とができるでしょう。

あなたはどこに風の道があるかを知らず、妊婦の胎内で骨がどのようにできるかも知らないのだから。すべてをなす神の業は知りえない。(11:5)

人には知り得ない領域がある。マクロの世界では風がどこから吹いてくるのか、ミクロの世界では受精から始まる胎児の形成が例に挙げられています。現代では、コヘレトの時代よりもはるかに科学的な研究が進み、多くのことが解明されてきてはいるものの、それでも生命そのものを与えておられる神の領域を説明し尽くすことはできないでしょう。私たちに分かることは、風の物理的な現象、胎児の成長の結果です。しかし、神がどのように、なぜそれを行なわれるのかは、明確な答えを持っておりません。

朝に種を蒔き、夕べに手を休めるな。うまくいくのはあれなのか、これなのか、あるいは、そのいずれもなのか、あなたは知らないからである。(11:6)

先のことを心配して手をこまねいてはならないとコヘレトは言います。将来何が起きてくるかは分からないのだから、じっと待っているのではなく、むしろ自分の果たすべき分を果たし続けなさいと。神の領域に踏み込むことはできません。しかし、人の側の「種蒔き」がなければ、それを成長させてくださる神の御業を見ることもできないからです。

「朝」「夕べ」と言われているのは、稔りを得る可能性を一つでも多く持つためでしょう。その片方が実るかもしれないし、うまくいけば両方が実るかもしれないと。

本論 3. パンを水面に投げよ (適用範囲の拡大)

ここまで来て、もう一度 1 節に戻り、私たちの生活への具体的な適用を考えてみましょう。1 節冒頭の「**あなたのパンを^{みなも}水面に投げよ**」の「パン」は基本的に金銭のことを指すと申しました。そのことを踏まえた上で、その他の適用を考えることも、間違っていないでしょう。ここでは三つ取り上げます。

② 献金

献金というのは、神に対する「感謝」「献身」「信頼」を表す信仰の具体的な行為です。与えられた財産の一部を主にささげるとは、「神への投資」という意味も含まれていると考えることができるでしょう。株式、債券、コモディティよりもはるかに信頼できる投資先として、信じて預けてみる。そういう意識を持って献金をささげてみるのも面白いかもしれません。

口を大きく開けよ、私はそれを満たそう。(詩編 81:11)

④若い時期に多くの友をつくっておく

これは、打算的な「保険」のように友と関わるということではありません。主が与えてくださった友を心から大切にし、その人が困っているときに手を差し伸べることにより、その愛の業は巡り巡って自分に返ってくるかもしれないということです。しかし、それをするときに「これだけのことをしてやったんだから、これだけしてくれて当然だ」という意識を持つのではなく、無償の愛としてそれを行ない、そんなことをしたことすら忘れてしまうことが大切なのです。このことは⑤の「慈善の業」にも100%通ずるものがあるでしょう。

⑥伝道

最後に、福音の種蒔きをするとき、自分が宣べ伝えた聖書のメッセージがすぐに受け入れられなかったとしても、それが無駄だったと考えてはなりません。御言葉が語られたということにおいて、私たちが果たすべき責任は果たされているはずだからです。人の心を動かされるのは神であり、私たちが介入できない領域であります。5節の「風」は「霊」とも訳すことができます。つまり、神が人の霊を動かされるのには「時」があるのです。しかし、福音の種が心に蒔かれていなければ、主の御業は進んでいきません。だから、私たちは信じて、希望をもって語り続けるのです。

【結論】

主が与えてくださったこの人生を無駄にすることなく、あらゆる面で種蒔きをしながら、やがて刈り入れの日を迎えたいと思います。そのために、日頃から物事をよく観察し、自分にできることを考え、適度なリスクを取ることを恐れず、主を信じて一步を踏み出したいと思います。刈り入れはこの世だけではないかもしれません。永遠の世界での刈り入れも念頭に置いて、私たちは今を懸命に歩んでいるのです。

【祈り】

与え主であられる神よ。私たちには各々の賜物や能力に応じて、あなたから与えられている分があります。それを成長させ用いていくことをあなたは喜んでくださいます。何か新しいことにチャレンジするとき、そこにはリスクが伴いますが、祈りつつ収穫の時を信じて種を蒔いていきたいと思えます。教会としても、今できることを考えております。また、一人ひとりがその人生で与えられているものを「神のもの」として管理していくことができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
パンを水面に投げるかの如く、先の見えない世界に向けて種を蒔かせ給う、父なる神の愛、
「一粒の麦」「いのちのパン」そのものとして地に落ち、多くの人に「永遠のいのち」という稔りを得させ給うた、主イエス・キリストの恵み、
神を最大・最良の預け先とした者を、無限の祝福にあずかせ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。